

587 準不潔手術(major surgery)術後MRSA及び真菌感染症の予防と対策

三重大学医学部第一外科

山際健太郎, 川原田嘉文, 長尾美昌, 岩田 真, 田端正巳, 田岡大樹, 東口高志, 吉峰修時, 伊佐地秀司, 横井 一

【目的】準不潔手術後MRSA・真菌感染の予防対策. 【対象と方法】最近4年6カ月の消化器手術602例を準清潔群377例, 準不潔群180例, 不潔群45例の3群に分け①術後感染症頻度, ②最近1年間の予防対策: β -ラクタマーゼ阻害剤の予防的投与, ティス®包交セットの導入, 鼻腔除菌, ③術後感染症の早期対策. 術後4日目以降 37.5°C 以上の熱発例で β -Dガラクトシド, イントトキシ(トキシカー:-Ec, イントス°シ:-Es)測定, Gram染色, 便CDチェック検索, を検討. 【成績】①術後感染症頻度: 準清潔群4%, 準不潔群9.4%, 不潔群20%(平均6.8%). 準不潔群では腹腔内膿瘍が3.3%と最多. 起炎菌では準不潔群の重症4例中MRSA75%, 真菌25%. ②予防対策効果: MRSAの術後検出率が準不潔群で対策以前の13.8%に比べ3.7%と有意に低下. ③術後感染症の早期発見: β -Dガラクトシド $>$ Es; フルコナゾールやミコナゾール投与. β -Dガラクトシド, Ec, Es低値, Gram陽性球菌多数, 便CDチェック陽性, バンコマイシン投与. 【結語】 β -ラクタマーゼ阻害剤やティス®器具, 鼻腔除菌が予防に有効. β -Dガラクトシド, Ec, Esによる早期発見が耐性菌発生を防ぎcompromised hostや障害肝の多い準不潔群で有用.

588 術後感染症の早期発見に関する検討

順天堂大学第2外科

藤沢 稔, 児島邦明, 深澤正樹, 別府倫兄, 二川俊二

【目的】手術症例において, 活性酸素放出能の変化を化学発光(Chemiluminescence, 以下CL)を用いて測定し, その推移が術後感染症の早期発見に有用であったので報告する. 【対象と方法】消化器疾患手術例59例(胃癌16例, 大腸癌13例, 肝癌7例, 門脈圧亢進症6例, 食道癌5例, 膵癌5例, その他7例)を対象として, 術前と術後0, 1, 3, 7病日に末梢血を採血し, WBC, 顆粒球数, 桿状核好中球の比率, CRP, CL値(1: CLがpeakに達したときのPeak CL, 2: CLがpeakに達したときの時間を表すPeak Time)を測定した. また術前の臨床的背景因子, 血液生化学的検査, 手術所見を比較するとともに, 術後早期感染発症の有無に関して術前後CL値の変動, 推移を中心に比較検討した. 尚, CL値はルミノール依存下, ザイモザン刺激で1時間測定し定量解析した. 【結果】感染の有無で比較すると, WBCは第3病日, CRPは第7病日でようやく有意差を認めたのに対し, Peak CLは感染例において術後1週間高値で推移し, 非感染例と比較して術当日, 第1病日で有意に高値を示した. 術前後CL値を測定することで早期感染発症の有無を予知しうると考えられた.

589 当院消化器外科病棟におけるMRSA検出症例およびMRSA感染症例の現況

国立病院九州がんセンター消化器部外科

大城辰雄, 馬場秀夫, 中島秀彰, 藤也寸志, 泉公一, 高江洲享, 石尾哲也, 伊地隆晴, 鴻江俊治, 岡村健

【目的・対象・方法】MRSA感染症の現況評価目的で, 1997, 98年に当科でMRSAが検出された24症例を対象に検討を行った. 【結果】i) 内訳: 術後MRSA感染15例(62.5%), 非周術期MRSA感染3例(12.5%), 無症候性MRSA保菌者4例, 非MRSA術後感染2例. iii) 術後MRSA感染症: 腸炎肺炎併発が5例, 腸炎単独が3例, 肺炎単独が3例, その他4例であった. 腸炎, 肺炎例では11例中9例に複数部位よりMRSAが検出された. iv) 術後MRSA腸炎: 便中MRSA検出例14例のうち腸炎発症例は8例(57%)であった. 8例中6例は胃酸分泌低下症例, 3例は術後合併症併発例であった. 発症日は平均6.0日で, バンコマイシン治療により症状は改善した. 術後MRSA肺炎: 喀痰MRSA検出陽性14例のうちMRSA肺炎発症例は7例(50%)に留まった. 【まとめ】MRSA検出症例の約3割は非感染例であり, 感染の成立には宿主要因の関与が重要であった. 患者の易感染性レベルに応じたMRSA感染症対策, 治療プランの決定が肝要と考えられた.

590 院内感染症からみた消化器外科領域における耐性菌感染症の現状

富山医科薬科大学医学部第2外科, 感染予防医学1, 附属病院薬剤部2, 検査部3

田内克典, 吉田郁子3, 三村泰彦2, 船田 久1, 竹森 繁, 坂本 隆, 塚田一博

【目的】今回当科および院内の耐性菌の現状と抗菌薬の使用状況を検討し報告する. 【対象・方法】1998年4月から12月までの12病棟における培養分離菌の検出状況, 薬剤感受性, 抗菌剤使用量を比較検討した.

【結果】高度耐性MRSA, VREは検出されなかった. VIE, ESBL産生グラム陰性桿菌疑いがそれぞれ1症例, メタロ- β -ラクタマーゼ産生緑膿菌疑いが7症例から分離されていた. MRSAは10%の検体に検出されており, MINOとGMによる薬剤感受性型は7型に分類され, 両薬剤に抵抗性を示したのは4株で同一病棟から分離されていた. 黄色ブドウ球菌中のMRSAの頻度は病棟により36%から100%で, 100%の病棟ではVCMの使用量が最も多かった. 【考案】多剤耐性菌に対しては院内感染の予防はもとより, 的確な疫学調査が必要である. またSurgical Site Infectionのサーベイランス等より抗菌剤の予防投与が見直されてきており, 予防投与の再考が必要である.